

分野横断的に考える

水から考える未来のコミュニティ - SDGs の上手な使い方 -

SDGsの17目標は、相互に深く関連しています。例えば「水」というテーマは、直接的には「目標6:水と衛生」に記されていますが、水質汚染の問題は「目標3:健康と福祉」、水源となる森林の保全は「目標15:陸の生物多様性」、水害といった自然災害への対応は「目標13:気候変動」など、多くの観点から捉えることができます。課題の間の関係性を理解し、多様な人たちと力を合わせてSDGsに取り組む基盤をつくるために、何ができるでしょうか。「水」をテーマに2015年7月～2016年2月に連続開催されたフィールドワーク運動型のワークショップ^(*)から、そのヒントを探ります。

暮らしに密着したテーマを、問いの中心に置く

多様な人たちが集まり、学び合う場を設定するために、誰もが「自分ごととして感じられる身近なテーマを設定します。人の生活に必要不可欠な「水」はその代表的なもの。これに「未来とコミュニティ」という普遍的なテーマを掛け合わせることで、暮らしに密着した視点からSDGsにアプローチするきっかけをつくります。



多角的観点から俯瞰する

世界人口の増加と都市化により、水資源への需要が高まっていること。世界各地で自然災害が増加し、その対応がますます必要とされていること。水不足が原因で、先進国でも紛争が起きていること。スラム街に暮らす人々には安全で安価な上下水道などのインフラを得ることが難しい状況にあること。人口減少や設備の老朽化が原因で、水道料金の高騰が問題となっていること。「水」に関わる活動をしている人から、国内外の多様な問題について情報を知ることを通じて、課題について深く知るための視野を広めます。



専門家から話題提供を受ける

言語化し、共有する

グループに分かれて、関心のある問題についてメンバーと共有し、その解決策を探ります。知ってほしい課題は何か、解決のためにどんなことが必要か。対話を通じて、ブレインストーミングし、考えを揉みほぐしていきます。関心が似ている人たちとチームを組んで、話し合いを深めるのもいいでしょう。ワークショップを通じて、「水道事業の民営化」「里山保全」「雨水活用」「日本の技術の活用」「防災・減災」「都市化」「ヴァーチャル・ウォーター問題」など多様なキーワードが共有され、それを巡る情報や意見を交換していきます。



ワークショップで、キーワードを共有していく

全体で共有し、次のステップを考える

各グループで話し合われたことを全体共有し、疑問点や今後取り組みたいこと、次に起こしたいアクションについて整理します。具体的な活動現場を持っている人のもとを訪れたり、関連するテーマの勉強会の設定を考えるなど、新しい企画が生まれるかもしれません。

(*)主催:NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)、NPO法人ウォーターエイドジャパン、国連生物多様性の10年市民ネットワーク(UNDB市民ネット)、協力:一般社団法人環境パートナーシップ会議(EPC)、アドバイザー:橋本淳司(水ジャーナリスト)

- 現場に出かけ、生の情報に触れてみよう -

安曇野フィールドワーク

水の豊かな土地として知られる長野県安曇野市。実は、湧き水や地下水の減少が問題となっていました。そこで市は「地下水保全対策研究委員会」を設置し、市民の生活用水の他、農業、養魚、ワサビ栽培、工業用水など、多方面に活用される貴重な水資源の利用法について、多様な主体(ステークホルダー)によって話し合う場を設け、自発的なルールづくりを実現しました。フィールドワークでは、安曇野市の水利用現場を訪れ、地域と水の実感すると共に、地下水熱源ヒートポンプを活用してイチゴ栽培試験を手がける信州大学の藤縄克之名誉教授に現場を案内いただき、地球温暖化やエネルギー問題の解決策といった多様な観点から、未来のコミュニティのあり方について考えました。



▲ 清らかな水があるところにのみ生息するわさび



▲ 地下水熱源ヒートポンプを活用したイチゴ栽培試験場

奥多摩フィールドワーク

東京都民の水道の約2割を支える、多摩川。その上流の水道水源林を奥多摩に訪れ、植栽や間伐などによる森林整備や再生に向けた取り組みが行われる現場に足を踏み入れて、活動の様子や手入れのされた森林と放置林との違いなどを実感しました。「奥多摩 水と緑のふれあい館」で水と緑の関係を学び、奥多摩湖(小河内貯水池)ダム建設の歴史などについて学んだ後に、間伐材の有効活用や森林体験などの事業を通じて、森林と都会、水源林と都市生活を結ぶ株式会社東京・水と市庭の奥多摩フィールド(小河内小学校旧校舎)を訪れ、事業を通じて目指そうとしている未来の姿について話を伺ったのち、ワークショップを通じて、この日の学びをSDGsと関連づけた視点から振り返りました。



▲ 奥多摩の水源林。手入れをされているかどうかで風景が随分違う



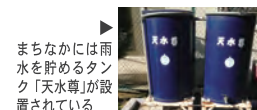
▲ 「東京・水と市庭」の奥多摩フィールド(小河内小学校旧校舎)にて

墨田区フィールドワーク

ゼロメートル地帯が広がり、水害の危険性が高い墨田区は、区をあげて雨水活用に取り組む「雨水活用の先駆地」でもあります。墨田区の年間降水量2000万トンは区民が1年間に使う水道水の量と同じ。「流せば洪水、溜めれば資源」を合言葉に、墨田区を代表する両国国技館や東京スカイツリータウン®にも、雨水活用システムが導入されています。墨田区向島の雨水活用スポットや、すみだ環境ふれあい館の視察を通じて、都市部の生活と水の関わりを多角的に学び、「都市における持続可能なまちづくり」について考えると共に、これまでの学びをコミュニティづくりにうまく結びつける方法や今後のビジョンについて共有し、年間を通じて開催したプログラム全体を振り返りました。



▲ 雨水市民の会の事務所は、情報発信の拠点にもなっている



▶ まちなかには雨水を貯めるタンク「天水尊」が設置されている